

〈書評〉

世の中は一問一答で動いていない

山野弘樹（2022）『独学の思考法：地頭を鍛える
「考える技術」』（講談社現代新書）

杉谷 和哉

1. はじめに

大海賊時代の世の中で、「四皇」と呼ばれる、海を皇帝のように支配する四人の人物がいる。その中の一人である「百獣のカイドウ」は、百獣海賊団を率いる豪傑であり、幾度にわたる処刑や敗北を経ても死なないという、規格外の頑強さと圧倒的な能力を備えている。そのカイドウが、自分の子供であるヤマトに対して言い放った台詞に、「一問一答で動いちゃいねえんだ世の中は！！」というものがある。父親の方針に不満をもつヤマトが、続け様に投げかけた問いに対してのカイドウの答えである。

以上は漫画『ONE PIECE』の登場人物に関するもので、2022年5月現在進行中の「ワノ国編」の一コマである。武闘派で強靱な肉体をもち、弱肉強食の論理で生き、強者との闘いに喜びを感じるという豪傑であるカイドウが放った上記の一言は、彼が単純な思考だけで生きてきた訳ではないことを示しており、極めて興味深い。

最近、YouTubeで流行している動画は、「論破」を生業とする人が、視聴者からの質問に対して、意表をついたかたちで答えるというものである。あるいは、私たちは見慣れない用語に出会ったり、困ったりした時は、すぐにスマートフォンを開いて知りたい事象を入力することで情報へアクセスする。一問一答が世には溢れている。

スマートフォンを通じた検索によって、我々は当座の問題や疑問の多くを解決できる。しかし、この世界は一問一答の積み重ねでできているわけではないことを忘れてはいけない。世の中は複雑であり、ある問題に対する回答が、別の問題を引き起こす

こともしばしばである。公共政策学では、これは「ウィキッド・プロブレム」として知られている（杉谷 2021）。たとえば、新型コロナウイルス感染症の感染対策として、徹底的なロックダウンが考えられるが、それをすれば、経済活動が停滞し、人々のメンタルヘルスにも悪影響を及ぼす。このような問題を処理する上では、一問一答の積み重ねはかえって事態の悪化を招く。

哲学者であり、ポール・リクルの研究を生業とする山野弘樹氏による『独学の思考法』は、こうした事態を見据えた上で、私たちがどのように、「独学」を通じて世界の解像度を上げていくかを論じた一冊である。

2. 本書の内容

今日の日本は「独学ブーム」と言わんばかりに、「独学」の名を冠する本がたくさん出版されている。「独学」と入力して本を検索すれば、大量の本がヒットするだろう。これ程までに「独学」が流行している現状からは、「独りで学ぶ」ことを求める人が増えているというポジティブな側面を看守できる。ひとりひとりの人間が、自分の頭で考えることは、民主主義にとっても肝要であり、その価値と大切さは、いくら強調してもし過ぎることはない（将基面 2021）。したがって、多くの人々が「独りで学ぶ」ことを志す今の傾向は、実に望ましいことのように思える。

ただ、別の見方をすれば、こうした時代は「自分のアタマで考えないといけない」プレッシャーに多くの人々が晒されている過酷なものとも思える。ここに、能力主義が全面化した熾烈な競争社会の相貌を見出すのは、決して難しいことではないだろう。

あるいは、こうした独学ブームが民主主義の深化に資するかについても疑問が残る。一人一人の人間が学びを積み重ね、社会に対する理解度を向上させていけば、人々は賢明なリーダーを選ぶようになるのだろうか？ そういった「神話」を、もはや我々は信じることなどできないのではないか。メディアからの情報を鵜呑みにしてはいけない、「自分のアタマ」で考えろ・・・こういったマントラを実行に移している人々の姿として、世間を騒がす陰謀論者が浮かぶのは、評者だけではない筈である。この事態は、一人一人が自分で考えて行動すれば社会がよくなるというヴィジョンが、一面的なものでしかなかったことを示しているのではないだろうか。

「独学」が陰謀論へと繋がる道を舗装しているのだとすれば、本書は危うい破滅への誘いにも見えてくる。だが、このような心配は杞憂に過ぎない。なぜなら、本書はその名に反して、「独りで学ばないため」の作法が列記された書物に他ならないからである。

本書は、ショーペンハウアーの有名なエッセイ、『読書について』と山野氏との運命的な出会いから本格的な考察が始まる。かつて山野氏は、「一問一答式知識観」と呼ばれる着想に支配されていたという。それは、「知識は累積的である」、「知識は単なる思考の道具である」、「知識を収集すること自体が思考力を高める」という三つのテーゼによって構成されている（同書：27）。そんな山野氏を救ったのが、『読書について』が指摘する、「読書は他人の頭で考えること」という至言であった。山野氏はそれを受けて、「一問一答式知識観」を修正するに至る。かくして、四皇の一角と同じ知見（世の中は一問一答で動いていない）に立つことができた山野氏は、「自ら思索する」ために必要なスキルを五つに分けて次のように説明する。

第一章「問いを立てる力」においては、言うなれば走り出す前のスタート地点の決め方が論じられる。「普遍性」、「具体性」、「価値観」の三つの観点から、問いを吟味する方途を明らかにする。続いて、第二章「分節する力」では、情報を整理して整える手法が開陳される。ここで読者は、その手法として本への書き込みという、古典的で地味な手法が奨励されていることに驚かれるかもしれない。しかし、こういった手法は「知的な方法論」として長らく論じられてきたものであり、決して侮ってはいけない（立花 1984）。第三章「要約する力」では、「分節」を経て情報を要約する方法が紹介される。要約は必然的に、主張の単純化を生むが、その単純化された主張を更に吟味し、再び読解を経ることによって、内容の解像度が更に向上するとされる。第四章「論証する力」は、「問い」と「答え」の循環及び、それらを繋ぐ根拠をいかにうまく構築するかが丁寧に説明されている。第五章「物語化する力」では、相手にどのようにして話を伝えるのか、「掴み」から「オチ」に至るまでの重要性が論じられている。ここまでの内容は「第一部」（原理編）とされており、第六章以降は「第二部」（応用編）に属している。

この第二部の構成は、「独学」本としては異例と言ってよい。なぜなら、第六章から第八章にかけて中心的な役割を果たしているのが、「他者」だからである。

第六章『『問い』によって他者に寄り添う』では、他者と対話する上で、「否定から入らないこと」といった指針が示される。特に、「言い方ではなく言っている中身が大事だ」という素朴な信念に関して、「そんなことは全くありません」（同書：157）とキッパリと言い切った上で、他者との対話を臨む以上、我々が心がけるべき諸要素が丁寧に説明されている部分は、有益な内容に満ちた本書の中でもとりわけ輝きを放つ箇所である。

第七章『『チャリタブル・リーディング』を实践する』では、批判的に読むために、他者の主張には一定の真理があると仮定してテキストを読む実践案が提示される。第

八章「他者に合わせた『イメージ』を用いる」では、「メタファー」や「アナロジー」の重要性とその危険性が論じられ、「他者に共感する感性や他者に対する想像力を、私たちは決して手放してはいけない」というメッセージが放たれる（同書：210）。

3. 本書の評価

以上、簡単ではあるが、本書の内容を概観した。いずれの内容も、「独学」を遂行する上で、「独り善がり」にならないための作法として極めて有益なものだと概括できる。特に、大学院のような、ある特定の技能に特化した集団が遍在する場でテキストを読んだり、そういった場で情報に触れたりする場がない人たちにとって、本書は最適なガイドブックとなるだろう。もちろん、多くの大学院生や研究者にとっても、自らの身の振り方を考え直すきっかけを与えてくれるという点で、有益な一冊であることも言うまでもない。

この前提をことわった上で、本書に関するささやかな二つの論点を、問題提起という形で示しておきたい。

第一に、本書が書かれた時代性についてである。先にも述べたように、「独学」を遂行する上で、今日ほど危険な時代はない。フェイク情報が蔓延し、知識はもはや他人に対して「マウント」をとる道具になり果てている。この「独り善がり」に学ぶことへの誘惑」に満ちた時代にあって、「独学」の重要性を称揚することの意味について、もう少し敏感であってもよかったのではないか。本書には陰謀論に絡めとられないための心構えの仕方を記している面もあることを踏まえれば、今日において多くの「独学者」たちが没頭してしまっている陰謀論にも目配せして議論を展開した方が、本書の内容は更に有益なものとなっただろう。

第二に、本書が前提としている、「独学」が必要とされている時代性についても指摘しておきたい。陰謀論が跋扈する時代にあって、なぜ我々は学ばなければならないのか？本書はこの点について、「絶対的な答えがないわけですから、与えられた解答に満足するのではなく、自ら学び、問題を発見する思考力こそが必要とされているわけです」（同書：3）と語っているが、果たしてこれは自明なのだろうか？むしろ、「今は答えのない時代なのだから、自分で考えよう」という要請そのものを、我々は疑うべきではないのだろうか。

もっとも、これらの論点は「ないものねだり」に過ぎず、本書の価値がこれらの指摘によって損なわれることは決してない。また、これらの課題は、今や「独学の思考法」を身につけ、前代未聞の問いに挑む力を備えた我々に課せられた宿題であると言

うべきであろう。

一人の男が「探せ、この世の全てをそこに置いてきた」と処刑の間際に叫んだことで始まった大海賊時代とは違い、「答えのない時代」は誰かが宣言して始まったわけではない。むしろ、世界は最初から一問一答で動いていなかったのではないだろうか。「答えのあった時代」が過ぎ去ったのではなく、「答えがあるかのように皆が振る舞うことができていた時代」が終わっただけではないだろうか。そのような時代だからこそ、我々は闇雲に航路を決めるのではなく、確かな指針に基づきつつ、次の目的地を定めなければならない。「少しでも実り豊かな人生の航海に向けて出発」（同書：215）する我々に贈られた羅針盤とも言うべき本書が、この過酷な時代を生き抜くための指針の一つとなるに違いない。

【参考文献】

将基面貴巳（2021）『従順さのどこがいけないのか』ちくまプリマー新書。

杉谷和哉（2021）「ウィキッド・プロブレムとしての新型コロナウイルス感染症：政治と専門性の関係を中心に」『医療福祉政策研究』第4巻1号、27-37頁。

立花隆（1984）『「知」のソフトウェア：情報のインプット&アウトプット』講談社現代新書。